北海道教育大学学術リポジトリ
Hokkaido University of Education Repository
国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

学校英語の変遷とコミュニケーション

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-07-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川上, 武志 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00004522

北海道教育大学紀要（第１部Ｃ）第46巻　第２号　　平成８年２月
Journal of Hokkaido University of Education (Section IC) Vol. 46, No. 2　　February, 1996

学校英語の変遷とコミュニケーション

川　上　武　志

はじめに

我が国の学校英語はちょうど20年前の「平泉・渡部英語教育論争」を契機に，臨教審・新学習指導要領を経て，現在では，コミュニケーションと国際理解を柱とした英語教育が展開されている．本稿では，過去20年間の学校教育をめぐる基本的な思潮を，この論争を中心にまとめるとともに，中学校・高校の英語を諸家の説を参考にしながら概観し，我が国の学校英語の目指すコミュニケーションのありようを考察する．そしていわゆる文法訳読式と呼ばれる指導法でも，やり方次第によってコミュニケーションのための英語教育になることを述べることにする．

１．学校英語をめぐる英語教育論争

1974年，当時の自由民主党政務調査会・国際文化交流特別委員会副委員長であった平泉渉氏の発表した「外国語教育の現状と改革の方向――一つの試案――」は，英語教育界に大きな動揺と混乱を引き起こした．

ここでは全文を紹介する余裕はないが，その要点をまとめてみると次のようになる．[(1)]

「国際化の進む我が国の現状を考え，また全国民の子弟と担当教職者とが，外国語の学習と教育とのために払っている巨大な，しかも報われない努力を見るとき，この問題は今やわが文教政策上の重要な課題の一つとなっているといわねばならぬ」として，

１．高度の英語の学習が事実上全国民に対して義務的に課せられている．
２．その成果は全くあがっていないが，その理由は何か．
３．検討すべき問題点．
４．改革方向の試案．
５．外国語教育の目的．

という諸点に沿って論を展開した．成果は全くあがっていない，という点に関しては，「ひとり会話能力が欠如しているというのではない．それはむしろ外国語の専門家としての特別の課程を進むものについてはじめていい得ることであって，国民子弟の圧倒的大部分についてみれば，その成果は到底そのような域にすら達していない．卒業の翌日から，その「学習した」外国語は，ほとんど読めず，書けず，わからないというのが，いつわらざる実状である．」と厳しく分析した．その理由として，

１．学習意欲の欠如．
２．「受験英語」の程度が高すぎること．
３．不効率な教授法．

を挙げながら，「改革方向の試案」として，

1．英語は膨大な時間をかけて修得される暗記の記号体系であって，義務教育の対象とするのは本来無理である．

2．英語を現在の中学1年終了程度まで，外国語の一つの「常識」として教授する．

3．高校教育が事実上義務教育化している現状にかんがみ，外国語教育を行う課程とそうでないものとを分離する．

4．中等教育の外国語教育の対象を英語とする．

5．高校の外国語学習課程は志願者のみに課し，完全集中訓練をおこなう．

6．大学の入試には外国語を課さない．

7．外国語能力に関する全国規模の能力検定制度を実施し，「技能士」の称号を設ける．

とした．これに対して，渡部昇一氏（上智大学教授）が真っ向から反対し「亡国の英語教育改革試案」を発表したのが翌1975年のことであった．渡部氏の論旨はおおむね次の2点にまとめられよう．

1．学校教育における潜在能力の養成という根本主義を見失い，学校における履修科目についての能力の顕在化を性急に求めるのは間違っている．教師は，伝統的な方法が決して間違った方法でないことを確信し，英訳・作文・文法において自信をもつこと．

2．顕在化された能力としての英語教育は別に考えなければならないこと．

そして，英語教育百年を総決算する白熱の論争として，両者の意見・続論をまとめたのが『英語教育大論争』（文芸春秋刊，1975年）であった．この本では，何故英語をヤルのか，中学校・高等学校6年間の英語教育は効果をあげているか，大学入試科目から英語をはずすのは是か否か，教師のとるべき効果的教授法は何か，学ぶ側が知らなければならない上達法は何か等々，英語に関するあらゆる問題が話題とされ，また論争し尽くされた．果たして20年後の今日では，それがどの様な方向に変わって来ていると言えるのか注目してみたい．

つぎに，中学校・高等学校の英語教育に大きな影響を与えたものに，臨時教育審議会が1987年に出した答申「外国語教育の見直し」がある．それは，

外国語とくに英語の教育においては，広くコミュニケーションを図るための国際通用語の側面に重点を置く必要があり，中学校，高等学校，大学を通じた英語教育の在り方について，基本的に見直し，各学校段階における英語教育の目的の明確化，学習者の多様な能力・進路に適応した教育内容や方法の見直しを行う．

というものであり，その後の学習指導要領に影響を与えることになった．最も新しい学習指導要領では中学校の英語教育の目標は[(2)]

外国語を理解し，外国語で表現する基礎的な能力を養い，外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てるとともに，言語や文化に対する関心を深め，国際理解の基礎を培う．

とされ，高等学校においても，[3]

外国語を理解し，外国語で表現する能力を養い，外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てるとともに，言語や文化に対する関心を高め，国際理解を深める．

ことが，目標とされ，日々の教育実践活動が展開されているのが現状である．

2．中学校の英語

中学校の英語は1947年以来，選択教科としてカリキュラムの中に位置づけられてきたし，これからも必修教科になることはそう期待できない．というのは外国語科目の選択枠の中には現在ドイツ語とフランス語が認められているが，ほぼ100％の日本人中学生が英語を学んでいることを考えれば，必修教科として位置づけることも可能であり，事実，各種の英語教育研究グループから成る英語教育改善懇なる会議では毎年のように，「英語科を必修に」というアピールを文部省などに提出しているが，一向にその気配は感じられないからである．ここでは，外国語を選択としている日本の外国語教育政策を是認することにして，これからは英語をはじめとする多くの外国語が中学校でも学ばれることを期待したい．

我が国の中学校の英語科をめぐる最近の情勢の中で，特に重要なものは，昭和56年からの学習時間数「週３時間」の実施であろう．学習時間数はそれまで標準５時間とか最低４時間，あるいは実質３時間などといろいろな形容詞とともに決められていても，実際にはあまり厳密な制約はなかった．しかし昭和56年からは，厳しく実質「週３時間」を守らなければならなくなった．ところが，学校行事などでその時間数の確保は困難であり，実際には「週１．８時間」等という学校も現れたりして，大きな問題となったのである．全国的に「週３時間に反対する会」が組織され，国会へ請願するための署名運動なども展開された．また公立学校の英語教育に見切りをつけた父母の中においては，わが子を英語の授業時数の多い私立中学校へ通わせたり，塾や家庭教師を求める動きが活発化した．文部省は，そのような動きのなかで，中学英語の時間数を「プラス１」という形で認め，学校裁量による英語時間数の増を可能にしたものの，この時間は他の３時間とは異なる評価を求められており，現場ではかなりの混乱が見られるようである．

また，中学校の英語科をめぐっては，文部省の検定教科書の問題もある．現在では７社７種類の検定教科書が日本各地で使用されているわけであるが，それぞれユニークな特徴が見られるにもかかわらず，その使用状況にはかなりの偏りがある．公明正大な選択基準で教科書の採択が行われることを希望する．

ところで新しい学習指導要領では文法事項の学年指定枠が撤廃され，いろいろな文法事項が各学年に散らばること，特に過去時制を１学年の段階の早い時期に導入する要望が現場では大きかった．しかしどの教科書も従前とほとんど変わりなく１学年の最後に登場させている．これまでの教科書での文法事項の提示順序が適切だったと判断したのであろうか，それとも急激な変化を恐れたのであろうか．筆者にはかなり早い時期に過去形を導入する教科書があっても良かったのではないかと思われる．自己表現活動の大部分は過去のことを言う場合が多いからである．平成９年版では，少々事態が変わることを望む．いずれにしても，中学校で学習する文法事項は英語の基礎・基本に属するものであり，中学校で修得する基本的な文法事項を十分に身に付ければ，学習者のその後の人生における英語とのつき合いがスムーズに行われることが予想され，そこにこそ中学英語の価値があるものと考えるのである．これをつきつめて言えば，中学英語の真髄はできるだけ要を得て簡潔な表現方法を習得することではあるまいか．すなわち，関係代名詞を習ったからといって，必ずしも関係代名詞を使った表現をする必要はないのであり，例えば，

This evening I am going to play the computer game which I bought at the department store yesterday.

という文は，

I bought a computer game at the department store yesterday.
I am going to play it this evening.

とする方が，より分かりやすく素直な表現と言える．もちろんその目的によってはより複雑な表現形式の方が好まれる場合もあるが，平均的な日本人中学生の身に付けるべき英語のありようを考えることも，重要な中学英語の課題となるだろう．

これは言い換えれば，「知識の英語」と「道具の英語」の問題ともなる．書かれたものを読んで理解できるためには，知識としての英語，特に基本的な文法事項に関する知識が不可欠であるのに対して，話したりする場合にはあまり文法にこだわらない自由な英語が求められる．「道具の英語」とはこのような文法に振り回されないで，自由に意志を伝達しようとするものであり，これからの日本人が最低限身に付ける必要がある英語力のことである．

3．高校の英語

高校の英語はやはり選択であるが，それは昭和45年からのことである．それまでの必修扱いと比べて，選択になった背景にはどの様な考えがあったのであろうか．学習指導要領の解説によると次のようになる．[(4)]

1）大学への進学率が上昇し，生徒の能力・適性・進路などが多様化してきたので，高校でのカリキュラムの編成も弾力化する必要があること．

2）国が必修教科として定める科目や単位数が軽減されたこと．

3）全ての生徒に，国際交流や国際理解の手段としての英語を身に付けさせることのそれほど差し迫った必要性もないこと．

このような理由にもかかわらず，英語は依然として大学への入試に大きなウェートを占め，高校生を悩ませる存在として，ほぼ必修科目なみに教えられている．

この状況の中で高校生のもつ英語学習への動機が思いやられるのであるが，そもそも高校英語は生徒たちにどの様な目的をもって教えられているのであろうか．新しい学習指導要領では，高校生に学習させる教材のあり方が明記されており，それはそのまま高校英語教師に対する要望となっているものと思われる．すなわち，[(5)]

1）教材は，その外国語を日常使用している人々を中心とする世界の人々及び日本人の日常生活，風俗習慣，物語，地理，歴史などに関するもののうちから，生徒の心身の発達段階及びその興味や関心に即して適切な題材を変化をもたせて取り上げるものとする．その際には，外国語の理解力と表現力を育成することをねらいとしながら，次のような観点に留意する必要があること．

ア．広い視野から国際理解を深め，国際社会に生きる日本人としての自覚を高めるとともに，国際協

調の精神を養うのに役立つこと．

イ．言語や文化に対する関心を高め，これらを尊重する態度を育てるとともに，豊かな心情を養うのに役立つこと．

ウ．世界や我が国の生活や文化についての理解を深め，国際的な視野を広げ，公正な判断力を養うのに役立つこと．

また，題材の形式としては，説明文，対話文，物語，劇，詩，手紙などのうちから適切に選択すること．

2）個人別，小集団別の指導を生かし，また視聴覚教材などを活用して，生徒の能力や適性などに応ずるよう工夫をすること．また，ネイティヴ・スピーカーの協力を得るなどして，生徒のコミュニケーション能力を育成するとともに，国際理解を深めるよう努めること．

これを見ると，高校英語はコミュニケーション能力を育成することが重要な課題であることがよくわかるのであるが，果たして実状はどうであろうか．近くの高校生の英語の授業に関する感想を聞いてみると，極めて批判的な言葉が目立つ．

例えば，生徒Aは，「単語の発音などはあまりしないで，英文を日本語に訳せば，それで授業は終わりです.」と言う．Bは，「意味を考えながら英文を声を出して読むことはほとんどなく，下手な発音で読み訳しているばかりでつまらない.」と批判する．またCは，「いわゆる文法中心の授業で，暗記をしっかりしておきさえすれば，テストもほとんどできます.」との返事である．

この3人の意見が高校での英語の全てを伝えるものではないとしても，このようにコミュニケーションを理想とする姿からはほど遠い現実が垣間見られる．

ではどの様に学校英語とコミュニケーションを一体化することができるであろうか．以下でそのための基本的な事項を考察していきたい．

4．コミュニケーションについて

4．1．コミュニケーションの定義

学習指導要領の指摘を待つまでもなく，現在の学校英語の方向は，好むと好まざるとにかかわらず，コミュニケーションに向いており，現場を預かる教師の中にはある種の戸惑いが見られるのも事実である．これまでのいい意味で長年培ってきた指導法を変えて新しい事態に対応することはなかなか難しいことは理解できるが，いつまでも古い殻に閉じこもっていることは許されないだろう．新しい時代に対応した姿勢が期待されているからである．

まず，コミュニケーションとはどの様に定義されているのか，そのあたりを探ることから始めてみたい．ロングマンの『語学教育・応用言語学辞典（*Longman Dictionary of Language Teaching & Applied Linguistics*）』には，

the exchange of ideas, information, etc. between two or more persons

とある．漠然とはしているが，「二人以上の人間の間の考えや情報などの交換」ということである．その手段は，別の辞典（*Longman Dictionary of Contemporary English*）によれば，

to make (opinions, feelings, information, etc.) known or understood by others,
e.g. by speech, writing, or bodily movements

となっており，話し言葉と書き言葉それに身体の動きつまりジェスチャーなどによって行われる．そのことは，日本語の辞典でも同じであり，『大辞林』には，

「人間が互いに意見・感情・思考を伝達し合うこと．言語・文字・その他視覚，聴覚に訴える身振り・表情・声などの手段によって行う．」

という記載がみられる．

このように辞書の定義を見ると，当然のことながら，コミュニケーションの意味がある程度明確になり，それと共に学校英語の目指すべき目標が定まってくる．要するに，コミュニケーション活動が授業の中でいろいろな形で実践されることが肝要であり，そのために利用できるものを積極的に活用していくことが必要となる．

4．2．Communicative Competence と学校英語

学習者のコミュニケーション能力を育成する授業を目指して，最近の学習指導案では Communicative Competence とか意思伝達能力という言葉が目立つ．また各種研究会でもよくそのテーマになっているのもこれらの言葉である．

語彙力・表現力・文法力の3つを考慮に入れながら，コミュニケーション能力についてみてみると，3者3様の重きをなしながらも，学校英語としてのバランスのありようが考えられる．中学生・高校生という頭脳柔軟な頃には，できるだけ多くの語彙を習得することが大切であり，文法は後からついてくるものとして，基礎基本に限定して，自己表現力を育てることが望ましい．そのためには，完璧主義を廃し，間違いに寛容な雰囲気で教師と生徒，また生徒同志の相互交渉（インタラクション）が展開されることが必要である．たくさんの語彙を覚えることがコミュニケーションの基本であるということは，後述するように，1語文でも意志の疎通が可能であることを見ても十分にうなずける．またキーワードという考え方も，コミュニケーションの重点のおかれているところを知る上で大切なものである．

要するに，学校英語の目指すコミュニケーション能力は完璧なものである必要はない．不完全でたどたどしくても興味を喚起できるようなものでなくてはならない．従って生徒の発する英語は完全な文の形でなくてもよく，間違いを含んでいるものでも構わない．生徒の伝えたい内容がほぼ伝わるならばそれでよし，とする姿勢が大事である．例えば，

A：Harry! Telephone.
B：Me?
A：Yeah, this is for you.
B：Ok. Is it Japanese or American?
A：Sounds like your friend.
B：Really? Another interesting news, I guess.

などといったやりとりが，生き生きと展開されるようにすることである．

4．3．コミュニケーションのレベルの問題

ところで，上の英語は中学ならどのレベルにあると言えるであろうか．決まり切った表現をどんどん覚えさせれば1年生でもいいレベルかも知れないし，また3年生でも言えないような気の利いた表現とも考えられる．概して，中学3年間，あるいは高校までの6年間で学校英語の求めているレベルは高いのであろうかそれとも低いのであろうか．例えば，全米外国語協会の示しているレベルは次のようなものであるが，中学3年のレベルはどれに相当するのであろうか．[6]

（1）初級（単語のレベル）：学習したことを使って最小限の言語伝達ができる．普通の母国語話者にはほとんど通じない．

（2）中級（文のレベル）：受け身的であるが，とにかく学習した要素を組み合わせたりして言語を創造的に使える．単純な方法で，基本的な言語伝達を始め，続行し，終えることができる．普通の母国語話者にかなり通じる．

（3）上級（単一段落中心のレベル）：会話に積極的に参加できる．異常な状況を言語的に処理できる．学校・職場での必須の言語伝達ができる．段落の長さの一まとめの談話を使って物語ることや叙述することができる．普通の母国語話者によく通じる．

（4）超級（複段落のレベル）：日常，社交，専門上の話題，抽象的な話題について，的確な待遇表現を使って話せる．母国語話者と同じ様な談話構成法を使って自分の意見を述べ，それを裏付けたり，抽象的な仮説を立てたりできる．

我々は，中学校の英語は初級英語である，と考えることがある．事実，英語検定などでも4級・3級は初級とみなされ中学生が挑戦する場合が多い．上のアメリカの場合は初級といえば単語のレベルである．電話をtelephoneと言ったり，虎をtigerと言えれば十分なのである．中学校3年までに中学生が学ぶ英語はかなりレベルが高いものになっているのである．それなのに十分にコミュニケーションができるようにはならないのはどういう理由からなのであろうか．先述した通り，単語レベルの基礎基本を十二分にやっておくことが肝要であると，上のアメリカの場合を考えても言えるのではないか．改めて，1語文の効用を強調しておきたい．

4．4．オーラル・コミュニケーションについて

新しい高校用学習指導要領ではオーラル・コミュニケーション（以下ＯＣ）が登場し少しずつ実践されている様であるが，中にはＯＣを掲げて文法を指導しているなどという事も聞こえてくる．大学センター入試でも平成11年度からはヒアリングテストが導入される計画があるという．いよいよ高校の英語教師にとって，じっくりとＯＣの指導に取り組んで行かなければならない時期だろう．

周知の通り，ＯＣには3科目が用意されている．それぞれの目標は次のようになっている．

Ａ：身近な日常生活の場面で相手の意向などを聞き取り，自分の考えなどを英語で話す能力を養うとともに，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる．

Ｂ：話し手の意向などを聞き取る能力を養うとともに，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる．

Ｃ：自分の考えなどを整理して発表したり，話し合う能力を養うとともに，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる．

どれも，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てることを謳っているが，それが基本的な留意事項で，その手段として，聞いたり，話したりということが考えられている．

もちろんＯＣの場合は，聞いたり話したりするわけであるが，コミュニケーションといえば，読んだり書いたりすることも含まれるのであり，高校英語でのそれらのバランスの問題も新しく考えられなければならない．高校の科目として登場した「リーディング」や「ライティング」といった科目にもＯＣ同様の注意が払われるべきであるが，現在ではＯＣにのみ興味関心が寄せられているのは，これまでの高校英語の経緯から見て仕方のないことかも知れない．

５．学校英語とコミュニケーション

５．１．コミュニケーションの構成要素（４技能再考）

英語学習には昔から４つの技能があるとされてきた．つまり，聞く・話す・読む・書くの４つである．そしてそれらは伝統的に次のように分類されてきた．

受動的技能：聞く・読む　　音声媒体：聞く・話す
能動的技能：話す・書く　　文字媒体：読む・書く

コミュニケーションには当然これら４つの技能が関わるわけであるが，４技能の基本的な押さえはどの様にするのが良いのであろうか．ここでは，Communicative Approach の視点から，聞くことを最優先し，読むことを第２にし，話すことと書くことを続けるのが理想であるということにしておきたい．というのは，最近のナチュラル・アプローチなどでも見られる通り，インプット源としての聞く・読む活動は如何なるレベルでも最も基礎的なものであり，十分なインプットなしでは話したり書いたりすることは思うようにはできないからである．コミュニケーションを重視する英語科教育は，まずは聞くことと読むことを重視することが近道とも言えよう．

５．２．コミュニケーション能力とその育成

ところで，コミュニケーション能力とは，４技能だけの問題と言えるのであろうか．実はもっといろいろな要因が絡み合って，コミュニケーション能力は形成される．よく引用されるものではあるが，Canal & Swainによると，

１）Grammatical Competence（文法的能力）
２）Strategic Competence（方略的能力）
３）Discourse Competence（談話的能力）
４）Sociolinguistic Competence（社会言語的能力）

の４つがコミュニケーション能力を考える上で考慮されるべきものである．

「文法的能力」とは，語彙や発音を含め，英語の語形成や文構成に関する知識・能力のことであり，学校英語では指導される基礎基本としての文法の力がコミュニケーションの土台となる．「方略的能力」とは実際の意志伝達活動において意志の伝達ができなかった場合，それを補助して何らかの意志伝達を可能にする能力のことで，実際の授業においては，とにかく何とか意志の疎通は図れるのだ，という自信を持たせる指

導が有効になる．「談話的能力」は文法的形態と意味とを調和させながら一連の話し言葉や書き言葉を理解できる能力であり，総合的な英文理解や異文化理解のためには大いに必要とされるものである．最後に「社会言語的能力」は，社会生活の様々な場面・状況において，適切な話題や事柄を選択し円滑にコミュニケーションを継続できる能力のことであり，授業の中では，実際のコミュニケーション場面にできるだけ近づける指導をすることがこの能力を養成することになろう．

では具体的には，どの様な指導が可能であろうか．ここでは中学１年の入門期の１語文を取り上げて考えて見る．現在発行されている中学校用英語教科書で，１語文を登場させているのは，２種類の教科書だけであるが，その意義は極めて大きい．（もちろんここで言う１語文とは，厳密な意味での１語ではなく２－３語文も含んで考えている）

まずEveryday English（中教出版）では，Lesson 2「英語で言えるかな？」として

A hot dog, please? —— A hot dog? —— Yes.
A cake? —— No. A pie. An apple pie.

とあり，またNew Crown English Series（三省堂）は，Lesson 1 My Town, Lesson 2 Kumi's Bike, Lesson 3 Three pensというように３つの課に当てる力の入れかたである．例をあげよう．

Hi. —— Hi. Your town? —— Yes. My town.
Your bag? —— Yes. My bag. Your bike? —— No. Kumi's bike.
My pens. One, two, three. Three pens.
Your stamps? —— Yes. —— One, two, three, four, five, six, seven. Seven stamps.

大げさに言えば，このような１語文により，コミュニケーションの焦点化・重点化が訓練されることになり，後の段階でのコミュニケーション活動でも大いに力を発揮するものと思われる．それはコミュニケーションの目的から見て，その機能（Functions）と意味（Notions）が一致する最小単位であり，我々の日常生活のコミュニケーションも多かれ少なかれ，このような形態で展開されているのである．このような１語文の発想形態に慣れることで，上に挙げた４つのコミュニケーション能力も徐々に形成されていく．

従って，学校英語の授業の中では，中学３年の段階でも，高校２年の段階でも，どのレベルにおいても，コミュニケーションの焦点化・重点化を目指すならば，１語文発想の視点はもっと注目され実践されるのが望ましく，将来（間違いを恐れることなく）英語を駆使できるようになるには不可欠のステップになるものと思われる．

５．３．コミュニケーションと指導法

現在の学校英語では学習指導要領の指示のもとで，コミュニケーションをキーワードとする授業が毎日行われているのであり，徐々にその成果も上がってきていると思われる反面，なかなか伝統的な指導法の枠から抜け出ることができない状況もある．ここではいくつかの指導法を概観しながら，コミュニケーションのための指導法はどうあるべきかを考察する．

５．３．１．　コミュニカティヴ・アプローチ（Communicative Approach）

これは社会言語学の影響のもとで出てきたアプローチと言われており，人により様々な教授法があるが，

大まかな共通点として認識されているのは，次のような点である．

1．usage よりも use に重点を置いていること．
2．シラバスは Grammar よりも Functions, Notions を重視すること．
3．学習者のニーズを考慮した学習者中心の授業．

この指導法は，学習者のニーズが明確なＥＳＰなどでは有効であっても，多様な学習者を抱える学校英語の場合には，なかなか難しいようである。学習者はPseudo－Communicationの域を出られずに欲求不満に陥ることもある．学校英語ではコミュニケーション能力で見たような４つの基本的な能力や技能を授けることが大切であり，それらのバランスがほどよく確保されなければならない．

５．３．２．ナチュラル・アプローチ（Natural Approach）

テレルやクラッシェンの名前と共に挙げられるこの指導法は次のような原理に基づいている．

1．理解（Comprehension）は表出（Production）に先行する．
2．表出は段階的に行われるようにする．
3．シラバスはコミュニケーションという目標に基づいていなければならない．
4．様々な言語活動そのものが学習者の情意フィルターを低くするように計画されなければならない．

ごく初期の段階では，学習者は聞く力を伸ばすことを目的として，「沈黙の期間」を経験することが必要であり，理解可能なインプットを多量に浴びることが大切とされる．

この指導法によれば，早く話したいという学習者の気持ちは無視されることになり，アウトプットは十分なインプットの後ではじめて可能とされる．いろいろな問題点をはらみながらも徐々にその地位を固めてきている指導法であり，学習者の評判も良いという報告は見られるものの，その成果はまだ未知数と言える．

５．３．３．文法訳読法（Grammar－Translation Method）

一口に言って，伝統的な指導法であるこの方法によって，我が国の英語科教育は展開されてきた．良いにつけ悪しきにつけ，問題とされてきた指導法であるが，その原理は次のようなものである．

1．文法規則と例外の徹底的な暗記が学習の基礎である．
2．知的訓練としての文法規則の応用．
3．読みの力とは上手な発音ではなく，しっかりとした内容理解である．
4．音声の指導は行わない．

従って，新米の教師でなければ，授業の準備などはあまりする必要もなく，日本語を駆使すれば済むため，教師の英語運用力などは不必要というわけである．

これに対する批判としては，「言葉の学習の基本は音声である」，ということから始まって，「日本語に訳さないと英語が理解できない」，「日本語に訳しても本当の意味が理解できていないことがある」，「生徒の意欲を高められない」，ということが指摘されてきた．では，これらの批判に応えながら文法訳読法をどう改善していけばいいのであろうか．

文法訳読法を基礎に，コミュニケーションのための文法を考慮に入れながら，音声も重視した授業を展開する試みはどうであろうか．事実，多くの高校英語教師は文法訳読法に準拠して，意味の理解をさせ，その後で音読練習をし，英問英答などを行ったりしており，さらに文法事項や新出語句の導入まで英語で行おうとしている教師もいる．このように，日本語で意味を理解してからいろいろな英語に接する指導が実践されれば，文法にも音声にも強い意味理解もしっかりできた学習者が生まれることになる．この様にすると，改善された文法訳読法の教授法に占める位置は，極めて大きいものとなるだろう．

5．3．4．　協同授業（Team Teaching）について

このように見ると，コミュニケーションを目指す授業は文法訳読法でも可能であり，ナチュラル・アプローチなどの新しい指導法でも可能であるということになる．また一方では，外国人指導助手（以下ALT＝Assistant Language Teachers）を配置したコミュニケーション教育の充実も新学習指導要領の目玉であり，それによって国際理解教育を目指すコミュニケーションの展開も容易になる．そこで，両者の有機的な統合が図られることが緊急の課題となる．ALTを最大限活用しながら，伝統的な指導法をも生かす道はどの様なものになるのだろうか．

4技能をインプットとアウトプットに分ければ，聞くことと読むことが前者で，話すことと書くことが後者となるが，ALTを活用するとなると，聞くことと話すことが重視されるであろうし，伝統的な指導法によれば読むことと書くことが中心になるわけであり，そのバランスをどうするかということになる．ここでは，ALT も日本人英語教師も等しくその能力を最大限発揮できるような指導法が望ましい．つまり，ALTの利点としては音声の模範であることから，当然のことながら，学習者がよく聞くことができるような場を設けること，ALTと実際に話す場面を多くして学習者に英語が通じる喜びを体験させること，多量の易しい興味ある英文を読ませることにより英語文化に親しみALT から背景的知識を十分に学ばせること，そして間違いを恐れずに書いてみることにより意味内容に重きを置いた英文を書けるようにさせること等のアイディアが考えられる．また，日本人英語教師からは，文法的な知識を総動員して英文の確実な理解を助けること，自身の英語をALTの本物の英語とぶつけることにより，学習者に刺激を与え，言語・文化に関する興味・関心を育てることが考えられる．勿論，それぞれがその長所を生かすことができるよう，事前打ち合わせが周到に行わなければならないし，事後の相互反省の機会をもつことも大切である．

5．3．5．学校英語と受験英語とコミュニケーション

このように展開すると，学校英語と呼ばれる学校での英語教育は，文法訳読法の要素を盛り込んだ受験英語とも矛盾しないし，コミュニケーションを目標とする新しい時代の流れにもマッチしたものになるだろう．

受験英語の弊害として挙げられてきたものには，難問・奇問や極端な文法・文型主義があるが，最近ではヒアリングを課す大学も増え始めており，旧来の受験英語というイメージは払拭されつつあるのが現状である．そして，オーラル・コミュニケーションが学校での英語科教育の中で実践されつつある今，学校英語だけでは話せるようにならない，という批判も徐々になくなっていくものと思われる．その中にあって教師として生徒に是非とも習得させなければならないことは，4技能を越えたもの，あるいは4技能をまとめることができるもの，つまりしっかりと考えることのできる力を身に付けさせることにあると言える．Critical Thinking あるいはLogical Thinkingの力を付けさせることは，英語科教育のみならず，教育全体の目標でもある．

おわりに

本稿では，学校英語の目標に関して，平泉・渡部論争から，週3問題，そして中学・高校の英語の授業におけるコミュニケーションとその指導のあり方について見てきた．そして，なかんずく大切なことは学習者がしっかりと自分の力で考えることができる人間になるための援助を行うことであるという結論になった．

最後に筆者の考えを代弁する文章を引用して本稿を終わることにしたい．

とにかく「つまらない」のである．ここ10年くらい，特に「こみゅにけーしょん重視」と言われ始めてから，ますますつまらなくなった．道案内とか挨拶ごっことか，下手な発音での情報集めゲームとか，そういう児戯に類することばかりで，知的な興奮がまったくない．もちろん，昔もなかった．今になると何であんな無駄なこと，と言いたくなるほど「つまらない」文法ルールを与えられるばかり，しかも，単語や句は何の動機もなくただ覚えるだけということで，こういう英語に比べると数学とか物理とか，美術とか音楽，あるいは歴史などのほうがよほど面白かった．程度はたいしたことではないが，知的な興奮があった．英語にはないのだから比較にならない．（中略）

英語を「技能科目」と呼ぶのはもうやめようではないか．何も考えずにただ英語が使える人間を育てようなどという，それこそ非人間的な教育観は，もうやめたい．生徒たちを，英語教師よりも　はるかに知的な日常活動をしている存在として見ることを始めよう．そうでないと，英語こそが，非教育的な存在になってしまう．(7)

若林氏の言葉には英語教師に対する警鐘としての響きがある．コミュニケーションを目指す学校英語を実践するに当たって，是非とも留意しておきたい言葉のように思える．

（注）

（1）この引用及び以後の平泉・渡部論争に関わる引用は全て，『英語教育大論争』による．
（2）『中学校学習指導要領』（現行版）第9節・第1
（3）『高等学校学習指導要領』（現行版）第8節・第1款
（4）『高等学校学習指導要領』（昭和45年改訂）の解説の筆者による要約．
（5）『高等学校学習指導要領』（現行版）第8節・第3款
（6）田辺洋二『学校英語』（ｐｐ．44－45）による
（7）若林俊輔「英語教育を非教育的な存在にしないことについて」より

参考文献

Krashen, S.D. & Terrell,T.D. 1983. The Natural Approach: Language Acquisition in the Classroom, Pergamon/Alemany
Littlewood, W. 1981. Communicative Language Teaching: An Introduction CUP
Richards, J. et al.(eds.) 1992. Dictionary of Language Teaching & Applied Linguistics, Longman
Rivers, W. 1981. Teaching Foreign－Language Skills. University of Chicago
Stern, H.H. 1983. Fundamental Concepts of Language Teaching. OUP
Widdowson,H.G. 1978. Teaching Language as Communication. OUP
塩澤利雄他著．1993.『新英語科教育の展開』東京：英潮社
田辺洋二．1990.『学校英語』　東京：筑摩書房
平泉渉・渡部昇一．1975.『英語教育大論争』　東京：文芸春秋社

松野明（編）. 1988.『大辞林』　東京：三省堂
森永正治. 1995.「英語科教育のコミュニケーションに求められるもの」『子どもとコミュニケーション（新たな教科教育の展開）』（北海道教育大学教科教育学研究図書編集委員会編）東京：東京書籍
若林俊輔. 1994.「英語教育を非教育的存在にしないことについて」『語研だより』第61号. 東京：語学教育研究所
渡辺時夫他訳. 1993.『英語教育のスタイル（インプットからインタラクションへ』.
（原著：P.A.Richard Amato: Making It Happen）東京：研究社出版

他に
各種中学校用高校用英語教科書
『中学校・高等学校学習指導要領』